

日本周辺国際魚類資源調査委託事業

津本欣吾・岡本楠清・松尾剛平・柴原浅行・谷水宗美・赤松沙織・中村明菜

目的

2000年9月「中部及び西部太平洋における高度回遊性魚類の保存管理に関する条約(WCPFC)」が採択され2004年6月に発効された。我が国も2005年7月に本条約に加盟した。これに伴い、日本周辺に分布するカツオ・マグロ類も国際的な枠組みのもとに管理されることとなった。こうした情勢の中、日本周辺を回遊するカツオ・マグロ類についても、資源量評価やその動向予測、我が国周辺への来遊量の予測等に不可欠な科学的情報を収集、整理することを目的に、独立行政法人水産総合研究センターの「日本周辺国際魚類資源調査委託事業実施要領」に沿って調査を実施する。本調査事業は水産総合研究センター遠洋水産研究所を中心とする全国的な組織のもと実施された。この中で、本県は県内所属船によるカツオ・マグロ類の漁獲状況や漁獲物の生物的特性に関する情報収集に当たった。

方法

沿岸小型船(竿釣り・曳縄・延縄漁業)によるカツオ・マグロ類(クロマグロ、キハダ、メバチ、ビンナガ)の県内主要水揚港である和具、浜島、宿田曾、紀伊長島、尾鷲港と大中まき網漁業による水揚げのある奈屋浦港の計6港において、漁業種類別の水揚量調査を実施した。また、浜島、奈屋浦、尾鷲の各港においてはクロマグロを対象に漁獲物の魚体測定を実施した。熊野灘沿岸の大型定置網ではマグロ類がある程度まとまって入網することから、上記6港の集計とは別に県内大型定置網16ヶ統のマグロ類水揚げ量調査を実施した。

一方、近海・遠洋における中型・大型竿釣り船の漁獲動向については、三重県漁労通信連合会及び近海漁労通信連合会所属の標本船から「無線漁況連絡聴取簿(QRY情報)」の提供を受け、カツオ・ビンナガ漁船の月別、旬別稼働隻数及び漁獲量を緯度・経度毎に整理し、漁場の推移や漁況と海況の関連等について検討を行った。

結果および考察

収集したQRY情報をもとに、本県所属船のカツオ・ビンナガ竿釣り漁場の変遷を「三重県竿釣りカツオ・ビンナガ漁況総括」としてとりまとめ、漁場探査の参考資料として関係漁業者に提供した。また、カツオ・マグロ類の漁獲状況及び魚体測定データは委託元の(独)水産総

合研究センター遠洋水産研究所に報告し、太平洋におけるカツオ・マグロ類の資源量評価や来遊量予測を行うための根拠として活用された。得られた資源評価や来遊量予測の結果については、県内の関係漁業者、団体に情報提供した。資源評価や来遊量予測に関する結果の詳細は関連報文で報告されるので、ここでは本県所属船の2008年漁期におけるカツオ・マグロ類の漁況経過について概要を報告する。

1. ビンナガ漁況

1) 中型竿釣り船

QRY情報に基づく2008年の三重県中型竿釣り船によるビンナガ漁獲量は2,856トンで、極めて好漁であった前年(6,181トン)には及ばないものの、6月の好漁に支えられ、平年(1,924トン、1992~2007年平均)を上回る漁況となった(図1)。

中型竿釣り船によるビンナガ漁は、3月にB海区の西ノ島周辺海域で始まったが、4、5月はカツオ主体の漁となり、ビンナガの漁獲は低調に推移した。6月に入り、D海区の常磐~三陸沖(N35~40° E142~150°)で好漁となり、6月の漁獲量としては昨年を上回る2,524トン(全漁獲量の88%)の漁獲があったが、7月にはビンナガの漁獲は減少し、カツオ主体の操業となった。

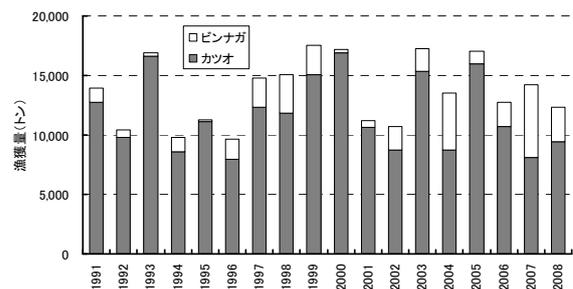


図1. 三重県中型竿釣り船によるカツオ・ビンナガ漁獲量の年変動

2) 大型竿釣り船

QRY情報に基づく2008年の三重県大型竿釣り船によるビンナガ漁獲量は2,216トンで、1992年以降最低の漁獲量となり、平年(10,586トン、1992~2007年平均)の21%にとどまる極めて低調な漁況で推移した(図2)。

大型竿釣り船によるビンナガ漁は5月にC海区(伊豆列

島東側漁場)で始まり、6月にはD海区の常磐～三陸沖(N35～40° E142～150°)で1,745トンの漁獲があったが、7月に入ると漁獲は激減した。また、近年低調なF海区(天皇海山漁場)、G海区(天皇海山沖合漁場)における漁獲は皆無であった。

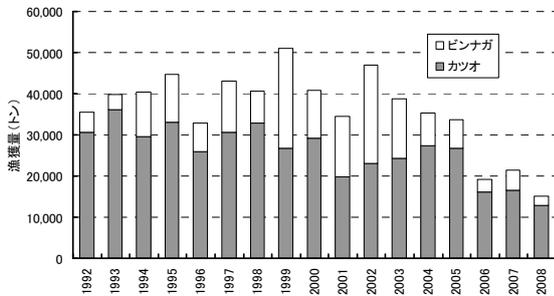


図2. 三重県大型竿釣船によるカツオ・ビンナガ漁獲量の年変動

2. カツオ漁況

1) 沿岸小型船

三重県主要4港(和具・浜島・長島・尾鷲)における沿岸小型船(曳縄・竿釣)による2008年のカツオ総水揚量は682トンで、主要4港で漁獲統計を整備し始めた平成1992年以降では2番目に低い水準であった前年(384トン)の178%となったが、平年値(1992～2007年平均:980トン)の70%にとどまり、2004年から続く低水準を脱することはできなかった(図3)。

熊野灘でのカツオの漁場は沿岸への黒潮内側反流の流入が顕著となった4月以降、比較的広い範囲に(大王崎～尾鷲沖)形成された。6月上旬以降、今年3月に浜島南沖30マイルに設置した浮魚礁に漁場形成がみられ、沿岸竿釣、曳縄船20～30隻が操業し、1隻あたり竿釣2～8トン、曳縄0.5～1トンの漁獲があった。4～6月の漁獲主体は銘柄「中小」(体重1.5～2.0kg)及び「中」(体重2.0～3.0kg)であった。7月以降は浮魚礁周辺海域での散発的な漁獲にとどまり、秋季の戻りカツオ漁も近年並みの低水準で推移した。

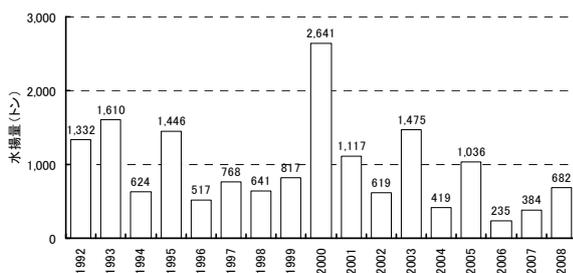


図3. 三重県主要4港(和具・浜島・長島・尾鷲)における沿岸小型船(曳縄・竿釣)によるカツオ水揚量

2) 中型竿釣船

QRY情報に基づく三重県中型竿釣船による2008年のカツオ総漁獲量は9,472トンで、前年(8,066トン)の117%、平年(1987～2007年平均:11,096トン)の85%と、平年値はやや下回ったものの、近年並みの水準を保った(図1)。

操業は1月下旬より南鳥島西海域で始まった。4月には漁場は北上し潮岬～房総沿岸域に、5月に入ると漁場は東進し、房総沖～黒潮統流域が主漁場となった。7月に入ると漁場は三陸沖合の海域に移り、9～10月にはN37～43° E142～155°付近の海域に収斂したが、前年同様10月下旬には漁獲量が急減、11月上旬にはほぼ終漁した。

3) 大型竿釣船

QRY情報に基づく2008年の三重県大型竿釣船によるカツオ総漁獲量は12,892トンで、1992年以降最低の漁獲量となった前年(16,556トン)をさらに下回り、平年(26,771トン、1992～2007年平均)の約1/2の低調な漁獲量となった(図2)。

2006年以降の漁獲量の減少は三重県所属の大型竿釣船の隻数の大幅な減少(2005年:20隻、2006年:12隻)に起因すると考えられるが、本年度は年間のCPUE(1日1隻あたりの漁獲量)も5.4トンと前年(7.0トン)、前々年(7.0トン)を大きく下回った。

3. クロマグロ漁況

三重県内主要6港(和具、浜島、宿田曾、奈屋浦、紀伊長島、尾鷲)における2008年のクロマグロの総水揚量23トンで、極めて高水準であった前年(208トン)の11%と、平年値(54トン、1995～2007年平均)も大きく下回る水準となった。漁獲の主体は定置網で、水揚量の60%を占め、次いでまき網(23%)、曳縄(10%)が多かった。

一方、夏季に行われる養殖用種苗のヨコワ(0歳魚)漁は、低調に推移した。養殖種苗用のヨコワ漁が盛んな浜島地区における2008年漁期の総漁獲尾数は約9,400尾で、高水準であった前年(約25,000尾)の38%にとどまった。

関連報文

平成20年度国際資源対策推進委託事業「日本周辺国際魚類資源調査」報告書、(独)水産総合研究センター。平成20年度三重県竿釣りカツオ・ビンナガ漁況総括、三重県水産研究所。